

【書評】

小島基洋・山崎眞紀子・高橋龍夫・横道誠（編）

『我々の星のハルキ・ムラカミ文学—惑星的思考と日本的思考—』

ダルミ・カタリン

(広島大学 (博士))

『我々の星のハルキ・ムラカミ文学—惑星的思考と日本的思考』（彩流社、2022年）は、「村上春樹研究フォーラム」の設立メンバーである小島基洋氏・山崎眞紀子氏・高橋龍夫氏・横道誠氏が編集をつとめた論考集である。本書はG.C.スピヴァクの「惑星思考」という概念にインスパイアされ、村上春樹文学の再文脈化を試みたものである。

スピヴァクの言う「惑星」とは「各地域の文化が等しく尊重される世界」（p. 4）を意味しており、「同一の為替システムを地球上のいたるところに押しつける」¹というグローバリゼーションとは異なる世界像を意味している。それを踏まえ、小島基洋氏は「日本語で書かれ、日本を舞台とする村上の作品は、英語や米国文壇を経由することなく、ダイレクトに各言語に翻訳され、この「惑星」の隅々まで流布していく」村上春樹の文学を「今や米国発の「地球」文学ではなく、日本発の「惑星」文学」として位置づけている（p. 4）。本書の目的は、このように日本から「惑星」の隅々まで行き届いてきた村上春樹文学の秘密を探ることであり、それに対して【翻訳】【歴史／物語(hi/story)】【海外作家】【紀行】という4つの論点が挙げられている。本書は以上の4点に整理され、計10本の論考と平野芳信氏による「村上春樹関係年譜」が収められている。続いては、各章の内容を簡単にまとめる。

【翻訳】では、村上春樹の作品が世界で読まれるために不可欠である翻訳という作業の諸問題が多面的に論じられている。第1章では、村上春樹の翻訳者であるアンナ・ジェリンスカ＝エリオット氏とメッテ・ホルム氏が『1Q84』の翻訳時にヨーロッパの翻訳者たちが遭遇した諸問題とそれぞれの解決方法を紹介しながら、新しい翻訳の実践モデルを描いている。2人は英語版の特権的地位が疑問に付されており、翻訳のスピードが増していくなかで翻訳者たちのチームワークが極めて重要だと指摘しており、『1Q84』の翻訳時に実践された「国境を越えた翻訳」(transnation-translation)（p. 40）が今後も不可欠だと主張している。

第2章で横道誠氏は重訳の問題に焦点を当てている。横道氏は、翻訳家でもある村上自身が重訳を問題視していない²ことを踏まえた上で、英語から重訳され、ドイツのテレビで論争を引き起こした『国境の南、太陽の西』の旧ドイツ語訳（2000年）と日本語から直訳された新ドイツ語訳（2013年）の比較検討を行い、新訳が日本語により忠実でありながらも完璧ではないことを明らかにしている。

¹ G. C. スピヴァク『ある学問の死—惑星思考の比較文学へ』みすず書房、2004年。

² 村上春樹・柴田元幸『翻訳夜話』文藝春秋、2000年。

第3章で小島基洋氏は、短編「パン屋再襲撃」の翻訳で失われたものを明らかにしている。氏はテキストにおける数多くの隠喩を読み解き、「僕」が語る昔の「相棒」とは『ノルウェイの森』等の作品に登場する直子だという興味深い解釈を示している一方で、このような解釈をできるのは日本語読者のみだと述べている。「男性であることを暗示しつつ、女性である可能性を排除しない」（p. 96）言葉である「相棒」が英語版・フランス語版・ドイツ語版では男と（誤訳）されてしまったと論じ、女「相棒」説が「強硬に排除されている」（p. 98）という、本作品の翻訳における問題を指摘している。

【歴史／物語（hi/story）】では村上春樹文学の特殊性と普遍性が論じられている。第4章で高橋龍夫氏は『海辺のカフカ』の登場人物たちが背負っている歴史、とりわけカフカ少年と少年Aの関係について考察しており、歴史を個々人の体験や記憶として物語に紡ぎ込むという村上春樹の創作方法を明らかにしている。氏は『海辺のカフカ』の舞台設定及び物語の時間軸における神戸連続殺人事件との関連性を詳細に分析しており、各人物造型について、「四国の様々な要素とも接点を持ち、作品全体が四国の風土や歴史、及び関連するテキストを暗示する設定となっている」（p. 128）ことを明確にしている。

第5章で内田康氏は、レヴィ=ストロースが提唱した「神話的思考」をキーワードに、〈喪失〉と〈父=王殺し〉という二つのコードを分析軸として設定し、村上の中長編小説における「物語」の推移を体系的に検討している。〈喪失〉については、「僕」と関わる登場人物たちを、その立場によって〈伴走者〉〈表層的喪失〉〈深層的喪失〉と区分し、更にまた別の観点からその働きを【他者】【分身】【メディウム】と整理した上で、こうしたカテゴリー内における登場人物たちの移動を通して物語の構造の変化を辿っている。なお、〈父=王殺し〉については、複数の神話との関わりを通して論じており、村上が「既存の「神話的思考」に盲目的に寄りかかっているわけではなく、それを現代の社会状況に合わせて変形させている」（p. 154）と述べ、村上春樹文学の神話的な物語構造のエッセンスを明確に掴みだしている。

【海外作家】では、初期の村上春樹作品におけるアメリカ文学の影響が論じられている。第6章で星野智之氏は、鼠三部作におけるジャック・ロンドンの痕跡を追っている。星野氏は『羊をめぐる冒険』に登場する架空の町「十二滝町」のモデルを検討し、「僕」と鼠の移動はジャック・ロンドンが体験したクロンダイクへの遠征と重なっているという興味深い見解を示している。また、『風の歌を聴け』に登場する架空の作家デレク・ハートフィールドのモデルはジャック・ロンドンだという新たな説を提示し、鼠の自殺で終わる『羊をめぐる冒険』は以前から「予告された物語」（p. 185）だと指摘している。

第7章でジョナサン・ディル氏は、初期の村上春樹作品におけるF・スコット・フィッツジェラルドとレイモンド・チャンドラーの影響、とりわけ『風の歌を聴け』とフィッツジェラルドの連作エッセイ「壊れる」三部作との類似性を論じている。氏は『風の歌を聴け』を『グレート・ギャツビー』と『ロング・グッドバイ』の延長線上に位置づけており、「僕」と鼠の関係が、マーロウとレノックスの関係、ひいてはキャラウェイとギャツビーの関係に由来する」（p. 210）と述べ、フィッツジェラルドとチャンドラーのモデルが「治療的な動機を説得力のある文学作品に変える方法を

彼（筆者注：村上春樹）に示す上で重要だった」（p. 211）という興味深い見解を提示している。

【紀行】には、村上春樹の紀行文と小説の関係及び小説の舞台を辿る論が収められている。

第8章で林真氏は、〈翻訳〉の概念を用いて村上春樹の紀行文と小説の相互影響について論じている。村上の紀行文は異郷の様子を「日常世界」の言語に〈翻訳〉して書かれているという批判³を踏まえ、「紀行文において〈非日常性〉から〈翻訳〉された〈日常性〉は、小説において〈非日常性〉へと再〈翻訳〉され」「その〈非日常性〉がまた、紀行文において〈日常性〉へと再〈翻訳〉される」（p. 230）と指摘し、村上の紀行文と小説の間に起き続けている連鎖を描いている。

第9章で山崎真紀子氏は、『ノルウェイの森』が書かれたローマで取材を行い、執筆の場所が小説に与えた影響を検討している。氏は『遠い太鼓』におけるローマに関する記述に基づいて村上がローマに「死」を読み取ったと指摘し、それがある女の子の死を扱った『ノルウェイの森』に直接反映されていると述べている。そして、村上が『遠い太鼓』で小説を書くことを黄泉の国に行くことに喩えていることを踏まえ、死者を蘇らせ、青年期との決別を描いた『ノルウェイの森』は「死と生が共存し続けているローマ」（p. 271）で書き上げられなければならなかった小説だと指摘している。

第10章は、高橋龍夫氏が「せとうち J・ブルー」と「村上春樹研究フォーラム」の共同企画であった『『海辺のカフカ』バーチャルツアー in 香川』（2021年）というイベントの講師として香川県を訪問し、『海辺のカフカ』の各場面について実地との関係性を探った体験をまとめたものである。関東出身で実際に高松に住んだことがある高橋氏は、四国について「確かに人間の生活の本質を改めて確認させてくれるような癒しの場所として、穏やかで神秘的なイメージを抱かせてくれる」（p. 298）と感想を述べ、第4章で再生の物語として捉えた『海辺のカフカ』が高松とその郊外を舞台に書かれたことの必然性を明らかにしている。

なお、巻末に収録されている平野芳信氏による「村上春樹関係年譜」は、村上の生活事項と作品のほか、村上が翻訳した小説や村上作品の様々なアダプテーションに関する情報も含まれており、村上春樹研究の基礎資料として不可欠なものである。

「はじめに」における細かいミス（各章の紹介において第6章と第7章は逆になっている）を除けば、本書は丁寧に編集されており、各章が豊かかつ多岐にわたっているにもかかわらず読みやすい印象を受けた。以上のまとめから伺えるように、本書に収録されている論文はそのテーマや方法において極めて多様であるものの、統一性を欠いているところもある。しかし、それは逆に本書の魅力でもある。例えば、【紀行】に収められた3本の論文自体は紀行文のような側面を持っており、写真を揃えて小説の舞台や執筆の場所を紹介するこれらの章は、村上春樹の愛読者にとっても興味深い内容である。一方で、村上春樹の歴史意識を考察する第4章や、村上の物語の構造を神話との関連で詳しく論じる第5章、または初期の村上作品におけるアメリカ文学の影響を明らかにしている第6章と第7章は、作品の分析が優れており、今後の村上春樹研究において重要な手がかりとなるだろう。

また、本書では翻訳の問題が多面的に論じられているのも注目に値する。【翻訳】に収められた

³ 今福龍太「『翻訳』としての旅行記」『新潮』1990年10月。

3本の論文から翻訳の重要性が見えてくると同時に、村上春樹の国境を越えた人気が翻訳作業に与えた影響も明らかになっている。それは第1章でジェリンスカ＝エリオット氏とホルム氏が描いているヨーロッパの翻訳者達のネットワークの誕生であり、第2章で横道氏が紹介した英語から他言語（ドイツ語）への重訳の問題の浮上である。なお、村上の殆どの小説が英語を経由せずに各言語に直訳され、英語版よりも多言語版の方が早く出版されるという、ジェリンスカ＝エリオット氏とホルム氏が描いている翻訳の近年（過去10数年）の動向は、小島氏が村上春樹の文学を「惑星思考」と結び付けている根拠にもなっている（「はじめに」）。

「惑星思考」というのは、村上春樹の文学を世界文学として位置づけるための的確な概念だと思われるが、本書は以上で引用した短い説明を除けばこの点について深く追求していない。「はじめに」において小島氏は各部について「村上がムラカミとなるためには外国語訳を必要とする」、「村上がムラカミとなるには、自らも閉じた日本文学の世界から抜け出すことが必要であった」（p.5）のような簡単な説明を加えているが、敢えて「惑星思考」という表現を用いる必然性が希薄であり、「なぜ村上春樹だけが、ハルキ・ムラカミとして、こうも容易く言語と文化の壁を越えていくのか」（p.4）という根本的な問題提起に対する結論は読者に委ねられている。

「おわりに」において小島氏が明らかにしているのは、本書のタイトルに含まれている「的思考」という言葉が加藤典洋氏の著書『戦後的思考』（講談社学芸文庫、2016年）から取られたものであり、本書が加藤氏へのオマージュであることである。小島氏は「加藤典洋チルドレン」として「加藤氏なき日本／惑星で、村上／ムラカミ批評を書き継いでいかねばならない」（p.335）と村上批評の未来像を描いているが、村上の文学を複数の視点から多様な方法で論じている本書はそれに見事に成功している。「国境を越えた翻訳」が今後の翻訳作業の望ましいモデルだとすれば、本書で実践された国境を越えた多面的な研究は今後も欠かせない。村上春樹文学を幅広い視点から論じている本書は今後の村上春樹研究の重要な手がかりとなるのは間違いないだろう。